没後100年

フェノロサの愛した日本美術

◆5

仏画の白眉　出生不詳、謎に満ちて

法華堂根本曼荼羅

「法華堂根本曼荼羅」（奈良時代）=Museum of Fine Arts,Boston.William Sturgis Bigelow Collection Photograph©Museum of Fine Arts,Boston

百橋　明穂

どのはし・あきお氏
1948年富山県生まれ。東京大大学院修士課程修了。文学博士。奈良国立博物館学芸員などを経て95年から現職。専門は古代美術史。著書に「仏教美術史論」「飛鳥・奈良絵画」など。

ボストン美術館に収蔵される仏教絵画の中で「法華堂根本曼荼羅」を、その白眉とすることに異論はないであろう。しかし、フェノロサゆかりのこの作品ほど歴史から無視され続けた例も珍しい。作品の出生からして不明である。

麻布に濃厚で入念な彩色で描かれた本図は、主題としては「釈迦霊鷲山説法図」である。すなわち釈迦が霊鷲山で、多くの菩薩たちや比丘を前に法を説く情景を描いた説法図である。背後には霊鷲山の深い山々が連なっている。懸崖とその間を縫って奥に進む水流は深い奥行きと遠近感を表し、やがて画面は広々とした水平線に至る。そこからは霊芝雲がたなびき、不思議な世界を象徴する。

一方、濃厚な彩色と極めて異国的な仏・菩薩の描写は、唐代仏画の本流を示唆する。この絵が描かれたとみられる天平時代の仏画には、薬師寺の吉祥天などのほかは、堂塔内部の板絵装飾や正倉院の工芸彩色しかない。類似の主題としては、当麻寺の阿弥陀浄土図（観経変相）、いわゆる当麻曼荼羅があるのみである。

本図には平安時代後期の東大寺別当寛信法務による修理銘が背面にあり、由来を推定させる。それによれば、本図は法華堂、すなわち現在の東大寺羂索堂（三月堂）に伝わる天竺（インド）の仏画とされ、「法華堂根本曼荼羅」と呼ばれた。著しい損傷をうけていたため修理を施したという。東大寺では、746（天平18）年以降毎年3月に法華会を桜会と称して法要を行っており、その折りに用いられたと推定してよい。

しかしながら東大寺の古記録には、この修理銘を除いて、天平から明治に至るまで本図に関する記載は一切ない。本図の出生については、その後、天竺仏画説に替わって唐画説と天平仏画説が登場するが、現在ではほぼ天平説が支配的である。しかし、異論がないわけではない。

1886（明治19）年11月19日に起立工商会社で、日本画家の川崎千虎が数十幅の仏画を見た際に、本図を「千有余年の古畫」として注目しているが、すでに外客が購入し、他国に輸出されることとなっていたという。その外客がフェノロサの知り合いのビゲローで、同年、古美術商から購入し、1911年にボストン美術館に寄贈した。しかし、なぜかその後、本図はビゲローコレクションではなく、フェノロサ・ウェルドコレクションとして扱われたことがあったという。

ビゲローは、絵画についてはフェノロサの意見を聞いてから購入していたという。しかし、実はフェノロサは本図に関する記述を全く残していない。彼の『東洋美術史綱』にも何の言及もない。ギリシャ美術の理想的な造形表現を仏教美術の世界で実現したとして日本古代の仏教美術を高く評価し、法隆寺金堂壁画や玉虫厨子に関する仏教的、かつ審美的な深い洞察を加えて、多くの称賛の言辞を残しているのにである。フェノロサが本図を見なかったとは想像できない。謎は深まるばかりである。

（神戸大教授）

（次回は9月20日の予定）